経営と健康

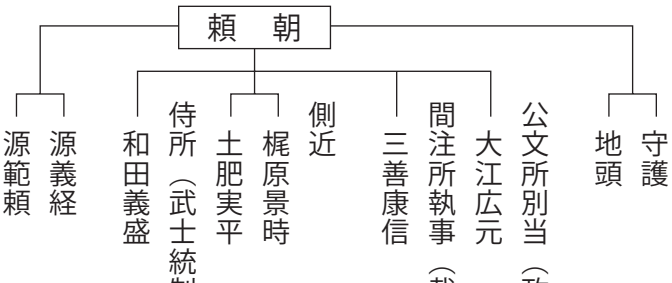
鎌倉殿の十三人

第二回

講談師　一龍斎貞花

12月号の巻頭言で忍田会長が、「渋澤栄一に学ぶ」をお書きになり、5月には子孫の渋澤健氏の講演がある由、経営姿勢の大切さを学んで頂けると思います。渋澤栄一を7回連続で書かせて頂きました。経営のみならず福祉に尽力された栄一翁に学んで頂ければと願っています。

大河ドラマ「鎌倉殿（どの）の十三人」の鎌倉殿の第一号が源頼朝。長い流人時代に培った人心掌握術が成功者となったが、挙兵に協力してくれた豪族を統率するための組織が優れていた。



他にも力のある豪族が何人もおり、簡単な組織図だが、それぞれ役職を与え、お互いが牽制し合うようにする。顕著なのが家康の組織。重役二人が手を結んで上の追い落としをしないように、ライバル同士を同職にして競わせるという、トップの保身策です。

トップ頼朝の死によって、頼家が二代鎌倉殿となるや、御家人たちが勢力争い。娘が頼家と結婚し後継者一幡を産むや、頼家の義父比企能員が勢力を伸ばし北条と対立。

頼家は側近を重用、蹴鞠に興じ政務はおろそかになり、比企の勢力をバックに常軌を逸した振舞いをする。

しかし、蹴鞠や和歌はただの遊びではなく、朝廷・公家との友好、対応に大切な糸口。総理大臣がアメリカ大統領とゴルフに興ずるのと同じです。

朝廷最大の権力者後鳥羽上皇も蹴鞠の名人でした。

頼家は、「吾妻鏡」に厳しく書かれたことが後世に暗君と悪いイメージとして伝えられたのも事実です。

慈円は、「愚管抄」で頼家の武芸を誉め称えています。

これではならんと政子は、頼家の権限を制限し、有力御家人十三人によって政（まつりごと）、初の合議制が敷かれたのです。

有力御家人十三人

「宿老十三人の合議によって政務を正しましょう」と、任命されたのが

執権　北条時政

政子の弟で二代執権となる北条義時

御家人筆頭　梶原景時

坂東武者の頭領　比企能員

頼朝の側近　安達盛長

三浦党のトップ　三浦義澄

軍事長官　和田義盛
行政長官　大江広元
司法長官　三善康信

頼朝の側近で大江広元の兄、公家との交渉に大きな功績を果した中原親能

武蔵の武士で一番に頼朝の元に駆けつけた旗上げ前からの家人　足立遠元

政所（まんどころ）の執事　二階堂行政

頼朝挙兵に早くから参加し、下総と常盤を治める長老　八田知家

この十三人によって政、初の合議制が敷かれ、この人たちをまとめていったのが政子です。

頼家を失脚させる目的ならば、娘婿頼家の親比企能員を参加せるはずはなく、また権勢を振るう能員を牽制するため加えたのかもしれませんが、外すわけにはいかなかったのも確か。

しかしこの十三人が一堂に会して会議を開いたという記録なく、それぞれが自分の職務をきちんとやることが、鎌倉幕府を盛り立てることになる。

娘政子の存在は、北条にとって大きな力であり、政子の父時政、弟義時が政子の力を利用し勢力を伸ばそうとする。

一方、比企能員は、娘婿頼家を盛り立て実権を握ろうとする。ここに北条と比企の対立が激しくなっていきます。

建仁三年八月末、頼家が病のため危篤状態におちいった。時政は、

「頼家が死ねば、家督は能員の娘若狭の局が産んだ一幡に譲られる恐れがある」と、一幡を殺害。さらに九月二日、能員をだまし討ち。

もっとも、能員がひそかに時政追討を企て、それが政子の知るところとなり比企を滅したという説もあり、どちらと決めつけるのはむつかしいところです。

奇跡的に回復した頼家はこれを知るや激怒。なにを仕出かすかしれんと。

そこで政子は、頼家の将軍職を剥奪し伊豆の修善寺に幽閉。十年前叔父範頼が頼朝に暗殺されたいわくつきの地です。

翌る元久元年（一二〇四）北条が送り込んだ刺客と壮絶な戦いを繰り広げた末、頼家は暗殺されこの時頼家わずか二十三歳、無念いかばかりだったことか。

翌る元久二年七月、政子が政治の表舞台に立つようになり、尼将軍として政子の裁量によって武士たちに土地を与えられたと「吾妻鏡」に記（しる）され、実験を握っていたことがわかります。

政子は家来に唐二代の名君太宗の「貞観政要（じょうがんせいよう）」を翻訳してほしいと命じている。

徳川家康が人使いがうまかったのは、「直言の功は一番槍に勝る」という貞観政要の教えによるものとよく言われます。

「君主たる者はなによりもまず人民の生活の安定を心掛けねばならない。人民を搾取して贅沢な生活にふけるのは、あたかも自分の股の肉を切り取って喰うようなもの。満腹した時には体の方が参ってしまう。天下の安泰を願うならば、まずおのれの姿勢を正す必要がある」

「臣下の忠誠を期待するためには、それ相当の礼をもって臣下を遇しなければならない」

後の帝が必読の書にした貞観政要を学ぶ政子の素晴らしさ、正に実力女性社長です。

三代将軍実朝の妻は、「母上様、母上様」と政子を慕い、政子も嫁を可愛がり、嫁が目を患った時、

「お茶を淹れたから、これで目を洗いなさい」と、当時お茶は薬用にも使われており、若い嫁に見せた優しい姑の姿も政子です。

兄頼家が修善寺で非業の最期を遂げた時実朝は十二歳の少年でした。

兄の殺害を命じたのは母と政子の弟北条義時だとひそかに噂され、温泉に入っていた頼家は、首を縄で絞め殺され残酷にも睾丸を切り取られたと、そっと聞かされた少年実朝はそのむごさにぞっとした。

「叔父義時が兄を殺した。次は自分が殺されるかもしれない」と、不吉な予感にさいなまれ続けます。

実朝は、母の活躍とは裏腹に、次第に政治への関心を無くし、藤原定家に和歌を学び、和歌に優れ「金槐和歌集」を編纂するなど、政は母親まかせ。跡継ぎの子ももうけず、幕府の後継者定まらず、政子は朝廷にかけあって皇族の一人を跡継ぎにすれば、朝廷と幕府の間がうまくいくようになるに違いないと考えた。

さらに有力御家人の勢力争い。ここぞと実権を取り戻そうとする後鳥羽上皇の鎌倉幕府打倒の計画。かくして鎌倉幕府最大の危機といわれます承久の乱に立ち上る政子の活躍は次回連続に申し上げます。パンパン